

# 京極御息所褒子歌合注釈 (三)

西山 秀人

Nishiyama Hidehito

岡田 博子

Okada Hiroko

小池 博明

Koike Hiroaki

## 要旨

延喜二十一年(九二二)京極御息所褒子歌合について、一九番歌から二七番歌まで注釈を施したものである。

【キーワード】 歌合 京極御息所 褒子 宇多法皇 藤原忠房 伊勢 凡河

内躬恒 春日社

本稿は「京極御息所褒子歌合注釈(二)」(『上田女子短期大学紀要』第二八号 平17・1)に続き、一九〜二七番歌までの三番九首

に注釈を施したものである。本注釈の方針・凡例については「京極御息所褒子歌合注釈(一)」(『上田女子短期大学紀要』第二七号 平16・1)および前号を参照されたい。

## 注釈

### 【本文】

本

躬恒無業  
みつね

19 わかなつむとしはへぬれどかすがの、のもりはけふやはるをし  
らむ

【校異】

○本一本七 ○みつね躬恒無集—(ナシ) ○わかとしごとなつむわかとしなつはへぬれと—  
わかなつむとしはへぬれと ○のもりはけふや—みともりはけふやは

【通釈】

若菜を摘んでは多くの歳月を過ごしてきたけれども、春日野の野守は今日、まさに(大君の御幸にあつて)この世の春を実感しているのだろうか。

【語釈】

○みつね躬恒無集 本歌合中「みつね」の作者記載を有するのは当該歌のほか

か10・22・28・31・34・52の計七首。いずれも躬恒集所載で、忠房の依頼による代作とみられる。なお、後述のごとく当該歌の上二句は本行部「わかなつむとしはへぬれど」が原態と目され、後掲躬恒集の「としごとにわかなつみつる」と本文を異にする。「無集」という注記はおそらくこのことに起因していよう。○わかなつむとしはへぬれど「わかなつむ春のたよりに年ふれば老つむ身こそわびしかりけれ」(貫之集③二八一)と同様、年を重ねるうちに老齡となつてしまったことをいう。なお、傍記本文は後掲躬恒集本文とも合致しており、あるいは躬恒集そのものを校合に用いた可能性もあろう。

○かすがのののもり 「かすがののとぶひののもりいでて見よ今いくかありてわかなつみてむ」(古今・春・一八・不知)を踏まえる。

「のもり」は野を守る番人。立ち入りを禁じられている野を見張る人。「あかねさす紫草野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る」(万葉・卷一・二〇・額田王)。なお、廿卷本および後掲躬恒集は「かすがの、もり」とするが、おそらく誤謬から生じた転化本文であろう。「袖

中抄」はこの本文に従い、「もり」は野守を略した表現であると説く。【他出文献】参照。○けふやはるをしるらむ 春日野で多くの春を過ごしてきた野守も、法皇の御幸を迎えた今日は、ふだんとは違った春を実感しているのだろうかと推量する。「めづらしきけふ」(1)と同様、祝意を込めた表現。ちなみに、「はるをしるらむ」の句は、同じく躬恒の「四月やまのゆきをみる／しらゆきもまだきえずけりやまざとはいづばかりかははるをしるらむ」(躬恒集③八〇・延喜御時屏風歌)にも見出せるが、こちらは季節の推移に主眼を置いたものである。

【他出文献】

○続後撰集・卷十六・雑上・一〇三一

同廿一年、京極みやすん所春日の社にまうで侍りける日、やまとの国のつかさにかはりてよめる 躬恒

としごとにわかなつみつつかすが野ののもりもけふやはるをしるらん

○夫木抄・卷二十二・雑四・一〇〇一六

永久四年百首 藤原忠房

わかなつむとしはへぬれどかすがののもりはけふをやはるとしるらん

○躬恒集③三二六

(法皇六条の御息所、かすがにまうづるときに、大和守忠房朝臣あひかたらひて、このくにのなるところを、倭歌八首よむべきよしきたらふによりて二首マおくる、于時延喜廿一年二月七日)としごとにわかなつみつつかすがののもりはけふやはるをしるらん

む

## ○袖中抄・第八

一、とぶ火の野もり

かすがの、とぶひの野もりいで、見よいまいくかありてわか  
な つみてん

顕昭云、とぶ火の野もりと云詞に付て両義あり。一には飛火の野守と云、一には飛火野の杜と云義也。うちまかせては野守は人なれば、その人に若菜つむべき程にやなりたると問こそいはれたれ、杜にわかかなをつまばこそは杜にわかかなやおひたるいで、みよとはいはめ、只春日のをみよと云て有ぬべし。又誰を出て見よと云にか。奥義抄云、追考云、普通義はとぶひの野もりいで、見よ也。而杜にわかにつまん事不審。但寛平法皇春日詣之時、大和守忠房所<sub>レ</sub>献歌云、  
わか  
な つむ  
と  
し  
は  
へ  
ぬ  
れ  
ど  
か  
す  
が  
の  
、  
も  
り  
は  
け  
ふ  
を  
や  
春  
と  
し  
る  
ら  
ん

是も猶社につめりとも詳不見。又野守を杜と書違たるにや。私考云、忠房甘首和歌をたてまつれるに、其歌甘首が返歌を二首づ、女房によませられて甘番につがはれて歌合にせさせ給へる也。忠房歌云、

わか  
な  
つ  
む  
云  
々  
、  
如  
前

返歌

けふにてぞわれもしりぬる春は猶かすがの野辺の杜ならねども  
ありへても春日の、もりはるにあふはとしもわかかなもつめるし  
るしか

又忠房

ことしよりにほひそむめるかすがの、わかむらさきにてな、ふ  
れそも

返歌

むらさきにてこそふるれかすがの、のもりよ人に若菜つます  
な

ちはやぶる神もみるらんかすがの、わかむらさきにたれかてふ  
れむ

就<sub>二</sub>此返歌等<sub>一</sub>今案に、野守と可<sub>レ</sub>云也。然者もりはけふをやと詠るは野守と可<sub>レ</sub>云を、詞を略歟。かすがの、野辺とも云、かすがの、とぶひのとも云てん。うへには又杜と云べからず。(下略)

【参考】

春日野の場面に扱った源信明の屏風歌「春日のの野もりと身をも  
なしてしかまつらん春をわが物とみん」(信明集・3・天曆御時名  
所屏風歌)が、おそらく画中には描かれなかったであろう野守を詠  
じていることから察せられるように、春日野と野守の取り合わせ  
は古今集以後すっかり定着をみた。御幸においても女房たちは道す  
から「春日野の野守」に思いを馳せ、和歌談義に花を咲かせていた  
ことであろう。「おほむまうけさらにもいはず」(日記)とも評され  
ている忠房であるから、そのような展開をあらかじめ十分見越して  
いたに違いない。折にかなった歌となるよう、忠房は躬恒に対して  
素材や内容についてある程度注文を出した上で代作させたのではな  
かるうか。菓子とともに各々の車にさし入れられた忠房の本歌には、  
彼の周到な計算が込められていることを見逃してはなるまい。

## 【本文】

左持

20 けふ見てぞわれはしりぬるはなほかすがの、べのものにぞありける

## 【校異】

○左持—左 ち かへし ○われはしりぬる—われもしりぬる

○はなほ—春はなほ ○ものにぞありける—せんものこそこそありけれ

## 【通釈】

今日見て、初めて私はわかりました。花はやはり春日の野辺にこそふさわしいものだったのだなあ（今日の御幸を見て、初めて私はわかりました。この御幸の盛儀はやはり春日野にこそふさわしいのだなあ）。

## 【語釈】

○けふ 行幸の行われた今日。○われ 本歌合には、他に18・33・45に用例がある。○ぞ 「ぞ—結び」が、「ぞ—ぬる」「ぞ—ける」と二度使われる。一首に二回の使用は、本歌合では当該歌ぐらい。

「みどりなるひとつ草とぞ春は見し秋はいろいろの花にぞありける」（古今・二四五・秋上）などの用例もあるが、稀。2も、未然形接続の接続助詞「ば」が二回使われる珍しい用例であった。○はな

桜だが、本歌をふまえれば御幸の喩えにもなる。本歌合では、御幸や人を喩える場合、「さくら」ではなく「はな」が使われるようだ（10・11・12・15・16・17・54・60など）。華やかさをも表す「はな」の方が、祝意が強く込められるからだろう。○ものにぞありける

「AはBものにぞありける（ものにざりける）」は、「君と我いもせ

の山も秋くれば色かはりぬる物にぞありける」（後撰・秋下・三八

○）のように、その時気づいた、Aの様子、Aに対する作者の心情、

Aの属性などをBで表現する、常套的な形式（『古今集』に六首、『後

撰集』に一三首、『拾遺集』に十首ある）。そのため、当該歌のよう

に、思っていた状態と同じだとの意の「なほ（やはり）」が使われ

るのは、いきおい少なくなる。ここでは、「なほ」があることから、

この時本当に初めて気づいたというよりも、前からそれとなく感じ

ていたが、今日の春日の花（御幸）を目の当たりにして、花（御幸）

はやはりどこよりも春日にふさわしいとわかったとの、確認のニュ

アンスが強い。また、当該歌のように「地名」＋「のものにぞあり

ける」という形をとり、Aはそこが一番だという意を表すのは、珍

しい。なお、本注釈（二）で、本歌合では、「AはBなりけり」の

構文は7だけとしたが、「にぞなりける／にこそなりけれ」を含め

れば、「AはBなりけり」の構文は、7と当該歌の二首となる。

【他出文献】

○袖中抄・第八・三二四

けふにてぞわれもしりぬる春は猶かすがの野辺の杜ならねども（19

【他出文献】参照）

【参考】

「かすがののもりはけふやはるをしるらむ」と、他人の心中を

主観的に疑問推量する本歌に対し、当該歌は、第一文で「けふみてぞわれはしりぬる」と、自分の経験を断定的に強調して応じる。ここには、贈答の呼吸ともいべきものが感じられる。

他にも、当該歌が本歌と対照的な点は、いくつも挙げられる。全体の組み立てでは、本歌は、主観的な推量を表す「らむ」が一首を統括して、春日野に長年いる野守の今の心中を推し量る。一方、当該歌は、現状をもとにする「けり」により、都から来た女房が自らの体験による感慨を詠む。春の知り方から見ると、今日、初めてこの世の春を知った野守に対して、当該歌の作者は、前から春日野の花の美しさ（御幸のすばらしさ）を何となく感じており、今日はそれを自ら確認したとする。

こうした対比は、本歌「のもりは」に、「われは」と応じることから、当該歌が意識してねらったものだろう。

これは、当然、祝意の表現の仕方に関わる。他人の心情を推量するという間接的な、本歌の祝意表現に対して、当該歌は、自身の心情を詠むという直接表現で、より明快にして返歌したのである。趣向があり優雅だが輪郭のぼんやりしていた本歌の祝意の表現を、当該歌がくつきりと浮かび上がらせたとも言えよう。

## 【本文】

右

21 ありへてぞかすがののもりはるにあふはとしもわかかなもつめるしるしか

## 【校異】

○右（ノ下ノ「持」ヲケズル）―右 ○ありへてぞ―ありへても

○はるにあふは―はるにあへは ○つめるしるしか―つめるしるし

## 【通釈】

生きながらえてこそ春日の野守が春（御幸の盛儀）にあうのは、年も若菜もつんだお蔭なのだなあ。

## 【語釈】

○ありへてぞ 本歌「へぬれど」を受ける。「ありふ」は、生きながらえる、生き続ける。本行本文の係助詞「ぞ」を、傍書や廿卷本は「も」とする。「ありへて」を強く指示する「ぞ」を下接する本行本文では、野守が御幸にあえたのは、他でもない生きながらえたからだという表現である。これは、「としはへぬれど―はるをしるらむ」と、年を重ねたことと春（御幸）を知ることとを逆接の関係でとらえる本歌への、積極的な切り返しとなる。一方、「も」とすると、接続助詞「て」に係助詞「も」を下接した「ても」という連語となり、それでもなおと逆接的に下に続く。当該歌に即せば、生きながらえて（老いさらばえて、ふつうは春とはもう無縁のはずなのに）、それでもなお春にあうの意となる。つまり、年を経ても依然として春にあうということになる。これでは、野守は今日より前にも、このような盛儀を経験していたことになり、祝意性がずいぶん減ってしまう。原態は、「ぞ」であったろう。「ありへてぞ」は、中世の『源氏物語』古注のいくつかに引用される「ちりひぢのよよのみかずにありへてぞおもひあつむることもおほかる」（二一九〇）があるぐらいで、和歌の表現としては、「ありへても」が一般的なようだ。「ありへても」は、「ありへてもくちしはてねばをみなへし

ひとさかりゆくあきもありけり」(亭子院女郎花合・四三)、「ありへてもかかろうき世になぞやともけふぞわが身をたのみはつべき」(長能集・五六)など、当該歌の前後に用例が見える。そのため、「も」と傍書されたのだろう。○はるにあふ 本歌「はるをしる」を受ける。春を「しる」と認識する本歌に対し、当該歌は「あふ」と体験とし、春と野守との関係をより深く表す。「しらゆきとみはふりぬれどあたらしきはるにあふこそうれしかりけれ」(素性集・六三)。なお、35にも同じ句が見える。本歌合と関係が深い躬恒には、「春にあ(あふ)」を使った歌が三首(躬恒集一四〇・⑦一八・⑦五三)あり、注目される。○としもわかかなもつめる 本歌「わかなつむとし」を受けらる。「つむ」は、年を「積む」と若菜を「摘む」との掛詞。「かすが野におほくの年はつみつれどおいせぬ物はわかななりけり」(拾遺・春二〇・円融院)。若菜は、19、41にも詠まれる。○しるしか 「しるし」は、効果、お蔭。「か」は、詠嘆の終助詞。係助詞「も」に呼応して詠嘆を強めることが多く、当該歌も「としもわかかなも」の「も」と呼応する。「おもひ佐びけふりは空に立ちぬれどわりなくもなき恋のしるしか」(寛平御時后宮歌合・一六八)。本歌合で、歌末が終助詞「か」となる用例は他にない。

【他出文献】

○袖中抄・第八・三二五

ありへても春日ののりはるにあふはとしもわかかなもつめるしるしか(19) 【他出文献】(参照)

【参考】

年も若菜もつんだかいがあつて、生きながらえた野守が、御幸の

盛儀にあえたとする。御幸にあうことを、「春にあう」光榮として詠み、祝意を表す。「つむ」にも祝意を込める。「ありへてぞ」と切り返しつつ、野守が御幸にあえた理由を、「わかなつむとしはへぬれど」と本歌が詠み込んだ、年と若菜をつんだことに求める。本歌との対照を意識的に詠んだ20と異なり、切り返しと共感の両方が詠まれる。

【本文】

本

躬恒  
みつね

22

きみがなほかくしかよはゞいそのかみふるきみやこもふりじ  
とぞおもふか集

【校異】

○きみがなほし(傍書「し□」ノ「□」ハ墨ニテ抹消。大成ハ「集」トスルガ、影印デハ判読不可)―きみかなほか集

【通釈】

あなたがやはり(これからも)このように通うなら、古い都も古びないだろうと思います。

【語釈】

○きみ 行幸当日の時点では、御息所をさす。その背後に、宇多上皇も意識しているだろう。歌合の場面では、第一義には返歌する女房をさすことになる(13) 【語釈参照】。8・13・25・31・43・63に

詠まれるが、8と63を除いた全てが、本歌の用例。○なほ やはり。これから以後も変わらずにとの気持ち。○かくし このように。今年のの始にかくしこそちとせをかねてたのしきをつめ」(古今・大歌所御歌・一〇六九)。○いそのかみ 「古」にかかる枕詞。ここで使用されるのは、大和国の歌枕(現天理市石神町)だからでもある。「いそのかみふるき宮この郭公声ばかりこそむかしなりけれ」(古今・夏・一四四・素性)、「いそのかみふるきみやこをきてみればむかしかざしし花さきにけり」(中務集⑦・二二)など、「いそのかみふるきみやこ」は、類型表現となっている。しかし、これらが懐旧の思いを詠むのに対し、当該歌は「ふりじとぞおもふ」として、場面にふさわしい祝意を表す。○ふるきみやこ 「ふる」は本来「石上布留の山なる杉群の思ひ過ぐべき君ならなくに」(万葉・卷三・四二二・丹生王)のように、石上にある地名だが、ここでは、同音の「古(き)」を掛ける。「ふるきみやこ」は、むろん忠房が歌を贈った地である奈良の都、平城京をさす。平城京は、本歌合では、当該歌以外は「ふるさと」という。たんに「みやこ」という時は、「ふるさとのはなこそみちてちりまがへみやこのひとのくるにしもあらじ」(54)のように、京の都をさす。○とぞおもふ 4 【語釈】 参照。

## 【他出文献】

○躬恒集・三三三

(法皇十六条の御息所、かすがにまうづるときに、大和守忠房朝

臣あひかたらひて、このくにのなるところを、倭歌八首よむべ

きよしかたらふによりて二首(ママ)おくる、于時延喜廿一年三月七日)

きくになほかくしかよはばいそのかみふるきみやこもふりしとぞおもふ

## 【参考】

これからもこのようにあなたが通ってくれたら、古びるはずの旧都も古びないと詠むことで、御息所(ひいては上皇。歌合当日は女房)を称讃し、これからも通ってくれるように願う。これは、そのままこの日の御幸のすばらしさの称讃と、行幸の継続を願うことになる。

当該歌より前の本歌では、「むめのはなさくらことしぞきみにみえるべらなる」(13)、「けふのみゆきをはなこそそみれ」(16)、「かすがののもりはけふやはるをしるらむ」(19)のように、連続してこの度の御幸を称讃する。当該歌では、それに加えて御幸の継続を願う。この後の本歌も、「はるごとくにきみしかよはば」(25)と御幸の継続を想定する。歌合冒頭には、信仰の対象である春日社の神と三笠山とが併置されていたことなども考えると(4 【参考】 参照)、本歌の順番にも配慮が払われていたか。

## 【本文】

左勝

23 かよふともしられじものをふるさとはかすがのやまのふもとならねば

## 【校異】

○左勝—ひたり かつ かへし ○やちよの—やちよの

【通釈】

たとえ私を通ったとしても、あなたに知られないだろうになあ。ふるさと（石上の古き都）は、春日の山のふもとではないのだから。

【語釈】

○かよふとも 本歌「かよはば」を受ける。本歌が「未然形+ば」で、順接の仮定条件を表すのに対し、逆接の仮定条件「とも」を使うことで、切り返しを強く表現する。○ものを 強い詠嘆を表す終助詞。本歌合には、「みそめずもあらしものをふるさとのほなにこころのうつりぬるかな」（15）の用例がある。これは、「……ものを。……かな。」と、詠嘆の終助詞で統括される二文からなる、きわめて感情表出の強いものである。当該歌は、「……ものを。……ば、」という、いわゆる倒置法であり、三句以下が初、二句の理由となる。しかし、「ことしぞきみにみえぬべらなる」に対して「みそめずもあらしものを」と返す15、「きみがなほかくしかよはば」に対して「かよふともしられじものを」と返す23ともに、「ものを」が本歌への強い切り返し表現となることでは、共通する。○ふるさと 13 【語釈】参照。本歌「いそのかみふるきみやこ」を受ける。

「かすがのやまのふもとならねば」からすれば、ここでいう「ふるさと」とは、本歌で詠まれた石上と布留を利用したもので、平城京ではなく、安康天皇（『日本書紀』では第二十代天皇）の石上穴穂宮、仁賢天皇（同二四代天皇）の石上広高宮を意味する。

【他出文献】 なし

【参考】

当該歌は、本歌の順接仮定条件に対して逆接の仮定条件で呼応し、本歌を否定する内容を、「ものを」という強い詠嘆で表現するなど、本歌への切り返しがきつい。その後示された、平城京ならぬ石上は春日山のふもとではないからという理由は、単なる初、二句の理由付けだけでなく、皇統の古さを示すことによる、祝意の表現とも考えられる。あるいは、平城京を「ふるきみやこ」という本歌に対して、いつそう古い都があることを提示し、平城京はまだ新しいと示唆することで、大和守忠房への挨拶としたものか。祝意の感じられない右歌に対し、当該歌にはこのような配慮があるため、勝となったのだろう。

【本文】

右

24 はるごと<sup>たかはし</sup>にきてはみるともいそのかみふりにしさと<sup>かはらじ</sup>のなには

【校異】

○はるごと<sup>たかはし</sup>に—春<sup>は</sup>ことに ○なには<sup>たかはし</sup>かはらし—<sup>はな</sup>なには<sup>かはらし</sup>とも

【通釈】

たとえ春ごとに訪れてみたところで、古くなって寂れてしまった石上の里は、「ふる」というその名前と変わらずいつまでも古びたままでしようよ。

【語釈】



○はるごとに 毎春。御幸が継続する意を込める。次の25にも同じ

句が見える。返歌合という形式上、本歌合には表現の似通った歌が

頻出しているが、こうした現象は女房たちが躬恒や忠房らの本歌を

あらかじめ通覧した上で返歌をものしていることを示唆しているよう

か。○きてはみるも 訪れてみたとしても。本歌22の「かくしか

よはば」に応酬した表現。○いそのかみふりにしさと 22【語釈】

参照。ここでは「ふり」を導き出す。「ふりにしさと」は古くなっ

てしまった里。古郷。『万葉集』では「鶉鳴く故りにし郷ゆ思へど

もなにそも妹に逢ふよしもなき」(巻四・七七五・大伴家持)をはじめ

め十例ほど確認されるが、その多くは飛鳥旧京周辺を指し、寂れ行

く土地のイメージで詠まれる。【参考】参照。○なにはか<sup>たかはし</sup>はらじ

「石上布留」という地名を前提に、布留(古)というその名のお

りいつまでも古びたままに違いない、と本歌に切り返した。なお、

「なにはかはらじ」は、他に「としふればくちこそまされはしはし

らむかしながらのなにはかはらで」(忠見集・一四九)のような類

例を見るが、その一方、傍記および甘巻本本文の「なにはたがはじ」

も「人をとくあくた河てふつのくにの名にはたがはぬ物にぞ有り

ける」(拾遺・恋五・九七七・承香殿中納言／大和物語・一三九段)、

「色にこそ我は見えけれ女郎花なにもたがはぬ物にざりける」(恵慶

集・九七)、「さきぬればちることかたきいはつつじなにはたがはぬ

いろにざりける」(能宣集③二六五)、「ながれゆくみづさへすめる

かがみやまなにはたがはぬところなりけり」(能宣集③四七四)と、

後撰時代の用例が目立つ。上掲「人をとく」の一首が後世人口に膾

炙したせいであろうか。

【他出文献】なし

【参考】

当該歌の表現はおそらく『古今集』所載の

いそのかみのなむまつが宮づかへもせでいそのかみといふ

所にこもり侍りけるを、にはかにかうぶりたまはれりけれ

ば、よろこびいひつかはすとてよみてつかはしける

ふるのいまみち

日のひかりやぶしわかねばいそのかみふりにしさとに花もさき

けり(雑上・八七〇)

に依拠したものとみられる。ただし、右歌は上二句で帝恩を讃え、

結句「花もさきけり」では石上並松の叙爵を花に喩えて祝意を表し

た点、むしろ発想的には「ふるきみやこもふりじとぞおもふ」とし

て御幸を寿いだ本歌22に近いものがある。当該歌は右歌の表現を

転用しながらも、「ふりにしさと」のなにはか<sup>たかはし</sup>はらじ」として真つ向

から本歌の内容を否定してしまった。せつかくの御幸にもかかわら

ず古き都はいつまでも古びたままだと詠むのはいかなものだろう

か。当該歌が負となった所以であろう。

【本文】

本

25 はるごときにきみしかよは、かすがの、やちよのまつもかれじと

ぞおもふ

【校異】

○本一本九 ○やちよの―やちよちとせ

## 【通釈】

春ごとにあなたが通つたら、春日野の八千代の松も枯れないだろうと思う（春ごとにあなたが通つたら、私の待つ思いもあなたから離れることがないだろうと思う）。

## 【語釈】

○はるごとに 24初句と同句。○きみしかよはば 「春日野の山辺の道を恐りなく通ひし君が見えぬころかも」（万葉・巻四・五一八・石川女郎）、「やまぶきはあやなくさきそ花みんとうゑてし君がかよひこなくに」（古今六帖・第六・やまぶき）などのように、恋歌の雰囲気がある。22に類似句「かくしかよはば」があった。「きみ」については、22【語釈】参照。○やちよの 「わが君は千世にやちよにさざれいしのはほとなりてこけのむすまで」（古今・賀・三四三）、「ちはやぶるひらのの松の枝しげみ千世もやちよも色はかはらじ」（拾遺・賀・二六四・大中臣能宣）のように、「やちよ」は末永いことをいう。○まつ 松は、常住不変の象徴であるとともに、霊力があり神の依代となる（『春日権現験記絵巻』には、春日の祭神が松の上に姿を現した場面が幾つかある）。そこで、藤原氏と国家鎮護の神を祀る地である春日と松との組み合わせは、ごく自然に成り立つ。ただし、この組み合わせは、本歌合より前には確実な例がないようである。『人麿集』（書陵部蔵、五〇一・四七）に「ここに来てかすがのはらをみわたせばこ松がうへにかすみたなびく」（二二）の用例があるが、『古今六帖』から『拾遺集』ごろの成立とされる『人麿集』の成立（島田良二説）から考えて、本歌合前の確

実な用例とするには疑問がある。そもそも、「春日の原」は『万葉集』に例がない。本歌合後には、前掲『人麿集』歌がやや異同を伴って「ここにしてかすがの山を見わたせばこまつが枝にかすみたなびく」（古今六帖・第一・かすみ・六一七）とあり、「ふたばよりのもしきかなかすがの山のこだかき松のたねぞとおもへば」（拾遺集・賀・二六七・大中臣能宣）、「ひくまつのちとせのほどはかすがののわかなもつまむものにやあらぬ」（能宣集・八三）などの大中臣能宣の四首をはじめとして、『馬内侍集』（一一二）、『実方集』（一一）に用例が見え、円融、花山朝の頃には、松が春日の景物として定着したようだ。本歌合には、春日野（春日の野辺）と松の組み合わせが八首ほど（25・26・27・31・33・43・45・55など。掛詞の認定で数は前後する）あり、集中的に詠まれる。本歌合が、松を春日の景物とする契機をなしたといえる。なお、恋歌めいた二句から、「松」は「待つ」の掛詞と考えられる。○かれじ 「枯れじ」と「離れじ」との掛詞。「ちよをへしまつは二葉もかはらぬにかれゆく人のころなになり」（順集・一一六）。

【他出文献】なし

## 【参考】

末永い長寿を保つ八千代の松だが、やはり八千代という限界があるのは変わらない。「ちとせまでかぎれる松もけふよりは君にひかれて万代やへむ」（拾遺・春・二四・能宣）の傍線部と同様の発想である。そこで、春ごとに女官（行幸当日の時点では、御息所。その背後に宇多上皇も意識する）たちが来てくれれば、その限界もなくなるというのである。松に永遠の齢をもたらすものが女官（御息

所・上皇) だというわけだから、これはとりもなおさず女官(御息所・上皇)を寿ぐことにもなる。また、恋歌めいた二句は、一首に恋の雰囲気を与える。一首の背後に、御幸と春日社の永続を願う気持ちがあるのはいうまでもない。

左勝

26 かすがのにはるはかよはむわがためにまつころありてよはひますなり

【校異】

○左勝—左 かつ かへし

【通釈】

(それではこれから先、毎年) 春が来たら春日野に通うことにしましよう。松は私のために待つという厚意があつて、(枯れないように) その齢を増してくれるのですから。(そして、幾久しく春日野に通えるよう、大君の御齢をも増してくれるのですから)。

【語釈】

○かすがのにはるはかよはむ 春は春日野に通うことにしよう。本歌の「はるごと」にきみしかよはば」を承け、御幸の継続を願う気持ちを含める。○わがためにまつころありて 松は私のために待つという厚意があつて。当該歌と同様、松を擬人化し、その心境を付度した例としては「こずやあらんきやせんとのみ河岸の松の心を思ひやらなん」(後撰・恋五九三九・不知)がある。「まつ」に「松」

「待つ」を掛け、「こころあり」に思いやりがある、厚意がある意を響かせる。○よはひますなり 萩谷氏は「私の齢を益してくれるのです」と訳出するが、従いがたい。本歌に「やちよのまつもかれじとぞおもふ」と詠まれていることを鑑みると、ここは来訪を待ちわびる春日野の松が枯れ朽ちないように自らその齢を増しているという意で、そこに法皇の長寿を願う心を重ねたものと解すべきであろう。「なり」は推定。松を長寿の瑞祥と捉えるのは常套だが、当該歌のように「よはひ」の語を用いた詠法が一般的となるのは「ちよにちよくはへたりともみゆるかな松のしたなるつるのよはひは」(天徳内裏歌合・四一)、「こまつばらひなるつるのむれあつおのがよはひをくらぶべきかな」(元輔集⑦二五・安和二年師尹五十賀屏風歌)など、今少し後になってからのことである。また、「齢増す」という詠み方も当時においては珍しい。【参考】参照。

【他出文献】 なし

【参考】

「よはひ」を「ます」と表現した例としては、

きみみればちりもくもらでよろづよのよはひをのみますすが

みかな (後拾遺集・賀・四四二・伊勢大輔)

などを見るが、いずれも後世の例であり、当時においては

しづくもてよはひのぶてふ花なればちよの秋にぞ影はしげらん

(後撰集・秋下・四三三・友則)

咲くかぎりちらではてぬる菊の花むべしも千世の齢のぶらむ

(貫之集③四二、延喜十四年二月亭子院調進女一宮屏風歌)

のごとく「延ぶ」「延ばふ」を用いるのが一般的であった。当時の

表現類型に則った歌ではないが、本歌を踏まえた上で此度の御幸を寿ぎつつ、その継続こそが松の常緑ひいては帝の長寿を保証するものだと詠じた点に周到的な配慮がうかがえる。当該歌が勝を収めた所以であろう。

## 【本文】

右

27 かすがのに<sup>ま</sup>まつしかれずは<sup>み</sup>たらしのみづもな<sup>が</sup>れてたえじ  
とぞおもふ

## 【校異】

○かすかのに<sup>ま</sup>まつしかれずは<sup>み</sup>たらしのみづもな<sup>が</sup>れてたえじ

## 【通釈】

春日野に私を待つ、松が枯れなかったら（あなたが私を待ち、私から心が離れなかったら）、御手洗の水も流れて絶えないように、私がかここ春日にやって来て、あなたと逢うことも絶えないだろうと思う。

## 【語釈】

○かすがのにまつ 本歌「かすがののやちよのまつ」を受ける（25

【語釈】参照）。本行本文は「かすがのに」。左に「の」、右に「、」（すなわち「の」とあるのにしたがって、「かすがのの」とすれば、「まつ」の連体修飾語となり、「まつ」は一義的には松となる。本行本文「かすがのに」とすれば、「春日野に―枯れずは」の他に、「春日野に―待つ」の文脈も成立する。そこで、本行本文の方が、「待つ」と「松」

との掛詞をより明瞭に示すことになる。○かれずは 本歌「かれじとぞおもふ」という推量表現を受けて、「ずは」と仮定表現をとる。「かれ」は、「枯れ」と「離れ」との掛詞（25【語釈】参照）。さらに、御手洗川も枯れないの意も響かせるか。○みたらしのみづも 春日社の境内を流れる御手洗川のこと。神社の傍を流れ、参拝者はここで身を清める。「恋せじとみたらし河にせしみそぎ神はうけずぞなりにけらしも」（古今集・恋一・五〇一）のように、一般には「御手洗川」と詠まれる。そもそも普通名詞だが、歌語としては加茂社の御手洗川として定着する（片桐洋一『歌枕歌ことば辞典 増訂版』、『歌ことば歌枕大辞典』）。「みたらしのみづ」の用例としては当該歌はごく早い例で、この後の用例は、「神がきのいがきのいかちぎらねどかくていくたびみたらしの水」（惟規集・四）あたりまで下る。この春日御幸も、当然御手洗川で潔斎したと推定されるが、記録が残らないため詳細は不明。参考として、以下の記事を挙げておく。『西宮記』春日祭「氏人集宿院、次向社頭使等着戒所」、『小右記』永祚元年三月二十二日一条天皇春日社行幸条「伝聞、有御禊事」。「みづ」は、「水」と「見つ」との掛詞で、「見つ」は本歌の詠み手忠房と逢うことをいう。むろん、本気で言うのではなく、挨拶である。「かすがにまうでける道にさほ河のほとりに、はつせよりかへる女ぐるまのあひて侍りけるが、（中略）あひはなれて六七年ばかりになり侍りにける女に侍りければ、かのくるまにいひれ侍りける／ふるさとのさほの河水けふも猶かくてあふせはうれしかりけり」（後撰・雑二・一一八一・藤原冬嗣）。○とぞおもふ 本歌歌末を繰り返す（4【語釈】参照）。4・22・25・27が、「じとぞおもふ」で終わる。

## 【他出文献】

○夫木和歌抄 卷二二・雑部四・かすがの、大和

延喜廿一年三月京極御息所歌合 同（読人不知）

かすがののまつしかれずはみたらしの水のながれてたえじとぞおもふ（九六八七）

○袋草子

かすが野の松しかれずはか<sup>マ</sup>はのながれてたえじとぞ思ふ（八〇九）

○袖中抄

かすがののまつしかれずはみたらしの河のながれはたえじとぞおもふ（五五三）

## 【参考】

本歌「はるごと<sup>ニ</sup>にきみしかよはば」という仮定の実現を、「（春ごと<sup>ニ</sup>）に私が通うのは）たえじとぞおもふ」と否定推量で、予想する。この消極的表現は、勝となった左歌「かすがのにはるはかよはむ」の意志の表現と対照的である。そこで、負けとなったのだろう。

尽きぬ流れが永続性の比喻となるものに、「（宇多法皇の）大井川の行幸にさまざまのだいどもをよませたましに／つるかはにたてるを／みづちかみすまひすればやまなづるのながれてちとせありといはるる」（頼基集・二二六）、「延長四年九月法皇の御六十賀、京極のみやす所のつかうまつり給ふ時の御屏風のうた十一首／滝の水／おもふこと滝にあらんながれてもつきせぬものとやすくたのまむ」（貫之集・一九二）などがある。

春ごと<sup>ニ</sup>に春日に通うということは、とりもなおさず春日社の永続性を言祝ぐことになる。なお、他出文献のように本歌とは関

係なく、当該歌を単独で読む場合は、春日社の永続性のみを詠んだ歌になる。